

平成22年6月24日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530620
 研究課題名（和文） 心理臨床家の相互学習を活性化する「対話の場」の設計とその効果に関する研究
 研究課題名（英文） A study on the design of “field of dialogue” to promote mutual learning among psychotherapists
 研究代表者
 花田 里欧子（HANADA RYOKO）
 京都教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：10418585

研究成果の概要（和文）：本研究は、臨床家が臨床心理面接という「対話の場」を設計する際に、熟練した臨床家の技は、クライアントとの間のどのような相互作用パターン（対話の行い方の様式）として立ち現われてくるのかということについて、初心の臨床家との比較、検討を行い、次の2点を明らかにした。1. セラピストの相互学習を推進、活性化するモデルを設計し、面接という対話の実践と研究の往還の中で、学習者自身が実用可能な知識の発見と共有を可能にすることを確認した。2. セラピストとクライアント間で生起する対話の齟齬の解消と、面接の成功が関連することを発話と身振りの量的分析と質的分析から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：When psychotherapists designed “field of dialogue” referred to as psychotherapy, how would the skills of expert psychotherapists manifest themselves in interactional patterns between the therapists and the clients? The present study attempted to elucidate it by comparing expert and novice psychotherapists with regard to interaction patterns they exhibit in their counseling practice. The results show 1) that the model created to promote mutual learning among the psychotherapists was indeed effective in that the cycles of counseling sessions and research activities (such as analyzing the counseling data and discussions of the results, etc.) provided the participants with opportunities to discover and share knowledge they can employ in the counseling at work, and 2) that the mismatch between psychotherapists and clients in how they conceive and express the clients’ problem can be resolved in counseling, and whether they can reach the solution seems to be correlated to the success of the psychotherapy as a whole. These were confirmed by quantitative as well as qualitative analyses of utterance and the accompanying gesture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総 計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：(1)臨床心理学 (2)情報学 (3)家族療法 (4)リフレクティング・プロセス (5)コミュニケーション (6)身振り／ジェスチャー (7)臨床教育 (8)心理臨床家

1. 研究開始当初の背景

心理臨床家（以下「臨床家」）における専門性の養成および維持には、指導者によるスーパーヴィジョンが不可欠であるが、近年初心の臨床心理士の急増から、指導者であるスーパーヴァイザー（以下「指導者」）が不足してきている。そのため、スーパーヴィジョンに加え、学習者同士でも専門性を高めていけるような相互的な学習方法（以下「相互学習」）の開発が、早急に求められている。「相互学習」では、学習者は、臨床歴や年齢、性別等の属性を異にしながらも、他の学習者と対等な立場で様々な観点を共有しつつ、臨床実践の見直しを自ら図らなければならない。これは、指導者と学習者という教育的人間関係を基盤とするスーパーヴィジョンとは対照的であるため、「相互学習」には新たな方法論が別途必要である。ところが、「相互学習」をどのように進めるべきかについて、現在まで明確な指針や理念は得られていない（藤原, 2005）。

この「相互学習」を行うための方法論の具体的な手がかりとして、家族療法で実践されている「リフレクティング・プロセス（以下 RP）」という方法が考えられる（Andersen, 1991）。RP は、臨床家、クライアント、リフレクション・チームによって構成され、学習者は臨床実践の現地訓練としてそれぞれの役割を担う。その実施手順と構造（下図参照）は次のようなものである。

- (1) ワンウェイミラーで仕切られた部屋の一方に臨床家とクライアントが、もう一方の部屋にチームが位置。
- (2) 面接 1：臨床家とクライアントは臨床心理面接を行う。チームはそれを観察。
- (3) リフレクション 1：チームが面接について話し合う。臨床家とクライアントはそれを観察。
- (4) 面接 2：臨床家とクライアントが、再度面接を行い、チームはそれを観察。
- (5) 以上の流れを、クライアントの問題が解決するまで繰り返していく。



RP による「相互学習」において、学習者は、面接→リフレクション→面接・・・という一連の作業の中で、クライアントの問題を共有し、その解決に向けて多様な意見や考えを活発に創出しあう「対話の場」に従事する。この時、クライアントの問題を解決に導くのは、学習者が生み出す多様な視点が、当該問題について膠着したクライアントの視点をいわば「揺さぶり」、クライアントがそれまで持ち得なかった新たな気づきを促すためである。そのため、クライアントの視点を「揺さぶり」得る、多様な視点が交錯する「対話の場」の設計が、「相互学習」の活性化に大きく関わってくることになる。

さて、RP による「相互学習」に関する先行研究は、臨床家の専門性向上への有用性を指摘してきている一方で（亀口, 2005; 三澤・久保・石井・花田, 2005）, 「相互学習」を根底から支える「対話の場」の設計の具体的な方法については明らかにしていないままである。そのため「対話の場」の設計は、経験を積んだ臨床家の職人的な「揺さぶり」の技に、実質的に依存してきている。ところが、学習者同士の「相互学習」では、指導者が関わることが必ずしもできないことが前提であるから、学習者は指導者の「対話の場」の設計にまつわる職人的な技を盗んだり、その技に依存したりすることができない。そのため、学習者が「相互学習」によって一定の効果を得ていくには、「対話の場」を設計する臨床家の技を解明することによって、その方法論を具体的に体系化し、それを相互学習の実践者である学習者が共有できるかたちで提供する作業が必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、臨床家が「対話の場」を設計する際に、どのような技を適用しているのかを、明らかにすることであった。熟練し

た臨床家(以下「熟練者」)の技には、どのような相互作用パターン(対話の行い方の様式)が存在するのか、ということについて、初心の臨床家(以下「初心者」)との比較・検討を行った。本研究が提示する「対話の場」の設計のための方法論は、以下のようにまとめられる。

- (1) 対話データの整備:「相互学習」における対話場面の映像音声を収録し、熟練者と初心者の比較から、対話データ(言語的・非言語的に関する資料)を整備する。
- (2) 対話分析:臨床心理学および情報学(情報科学・認知科学)がそれぞれ志向する対話分析の手法を併用することによって、熟練者の技に関わる対話を検討し、技の記述・予測を行う。
- (3) 学習者への還元:2)で得られた知見を「相互学習」の実践に適用し、その効果を評価する。それを受けて、1)に戻り、上記のプロセスを反復していく。本研究では、心理臨床の専門性の向上を目指している臨床心理学専攻の大学院生及び修士生が、「相互学習」を実践する場面を具体例として取り上げ、上記の方法論の実用性を明らかにする。

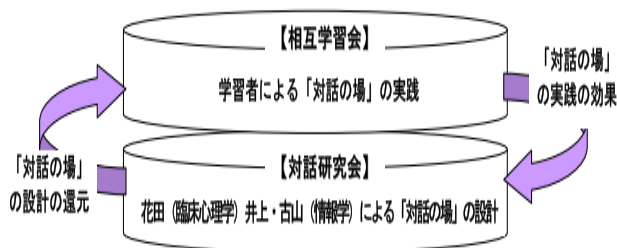
3. 研究の方法

本研究は、研究代表者および研究分担者による【対話研究会】を基盤に以下の作業を進めた。

- (1) 対話データの整備:対話データは、研究代表者(花田)が所属研究機関で既に実施してきている【相互学習会】で収録した。【相互学習会】は、学習者の臨床実践としての「面接会」(月1回)と臨床教育としての「検討会」(月1回)で構成される。「面接会」では学習者自らが対話データの収録を行い、「検討会」ではそれを視聴する振り返りから、臨床実践への示唆を学習者自ら得、翌月の「面接会」に臨む。ここでのデータ収録は学習者自身の利益を目的に行われるもので、あくまで学習者の、学習者による、学習者のための資料として既に活用されてきている。一方で、対話データのより精緻な検討は、学習者の振り返りのみでは徹底できない部分があり、本研究はそこを支援する臨床研究として位置付けられた。このように、本研究は、研究者による【対話研究会】および学習者による【相互学習会】の相互補完的な往還から、学習者を支援していく体制で行われた。対話データは収録後コンピュータに取り込み、そこでの音声情報を、言葉の重なり、間合い、言いよどみなどを一切含めすべて詳細にトランスクリプト(発話の文字デ

ータ)として書き起こした。次に、熟練者と初心者の特徴付ける対話上の着目すべき要素を、映像音声情報から抽出した。そこで、これまでの臨床心理学内外の対話研究の知見(若島, 2001; 福原・アイビイ・アイビイ, 2004; McNeill, 2005)を参照しながら、当該対話データから対話内外における言語(発話内容や韻律、話者交替等)および非言語(身体動作としての傾き、視線、呼吸、ジェスチャー等)を特定した。また、本研究では、対話場面を単に録音録画するだけでなく、学習者らの発話の状況とそこでの話者の意図、背景知識等についても、データ化した。また、話者の属性や対話の背景等は、メタデータとして情報整理を行った。

- (2) 対話分析:本研究は、臨床心理学的観点(花田)から、対話を会話・談話分析の手法により記述することに加え、情報学的な分析の導入により、熟練者の技に関わる対話を多面的に検討した。情報学的な分析とは、具体的には、情報科学的観点(井上)から、分析・統合的(帰納的)手法により、知見の定量的特性及び信頼性を把握した。また、認知科学的観点(古山)から、対話環境の動的変化を捉える(構成的)手法により、要素の位相関係や関係性の変化を把握した。以上、臨床心理学および情報学の協働により、熟練者の「対話の場」の設計方法を詳細に解析し、それがどのように組織されているのかについて、明らかにした。
- (3) 学習者への還元:(1)および(2)から得られた知見を【相互学習会】に還元したときに、学習者の「相互学習」を活性化する「対話の場」が構築されるかどうかについて、臨床心理学および情報学の観点から、その効果を評価した。そして、当該の【相互学習会】で収録された対話データを、再び1)に戻し、2), 3)と上記のプロセスを反復するなかで、一連の方法論を洗練した。



4. 研究成果

研究の主な成果

本研究の主な成果として、見出された知見

と対応する 5. 主な発表論文について、以下にまとめる。

- (1) セラピストの相互学習を推進、活性化するモデルの設計と検証：面接という対話の実践と研究の往還の中で、学習者自身が実用可能な知識の発見と共有を可能にした。図書②，学会発表⑪⑫
- (2) ビデオ・音声・身振りアノテーション・トランスクリプトの作成：マルチモーダルデータ収集のノウハウを研究コミュニティと共有した。学会発表⑨
- (3) 発話の誤りが身振りによって修正される現象の発見：他の話者の問題点を直接的に指摘することによる心理的な抵抗の発生を回避する働きを質的に分析した。図書①，学会発表⑧⑩⑭
- (4) 発話種別と身振り使用の関係の解明：身振りを伴ってなされる発話連鎖の発見および専門対話の経験が発話の規則性に及ぼす影響を明らかにした。雑誌論文①，学会発表⑤
- (5) 対話の大域的な分割の異なる定義の比較：面接をいくつかの意味的段階に区分する基準を考察した。学会発表④⑦
- (6) 対話技法の語彙面からの失敗要因解明：心理臨床における専門家の働きかけが受容されない理由を考察した。学会発表②⑥
- (7) 意味的な齟齬の発生と身振り情報の関係の解明：身振り使用が直接的には意思疎通失敗を予測しないことを示した。学会発表①⑬ 雑誌論文②

その他(計測器やソフトなど)として、心理臨床対話コーパス 25 対話(約 21 時間)：内トランスクリプトのある物 17 対話(約 17 時間)、身振りアノテーションのあるもの 6 対話(約 6 時間)である。あわせて、上記コーパス構築のための各種マニュアルを作成した。

得られた成果の国内外における位置付けとインパクト

本研究で得られた成果は、臨床心理学が抱える、「臨床家の教育研修を具体的にどうしていくか」という今日的課題に対して、特に以下の 3 点から寄与するものと位置付けられる。

- (1) 指導者によるスーパーヴィジョンという従来一般的に採られてきた方法論にとどまらず、学習者同士による「相互学習」の方法論の体系化を進めた点。
- (2) 研究者が一方的に学習者の「相互学習」における対話場面を分析するのではなく、学習者と研究者の作業の往還の中で、学習者により有用な「対話の場」の設計方法を丹念に探っていた点。
- (3) 臨床家自身の報告による事例研究ではなく、第三者による対話分析というより

客観的な研究方法を用いて、「対話の場」の設計を行う熟練者の技を明らかにした点。

そのインパクトは、本課題に取り組むにあたり、臨床心理学と情報学(情報科学・認知科学)の協働的アプローチを採用したことにある。これまで臨床心理学における対話研究の必要性が、実証性という観点から指摘されながらも、その試みは殆ど行われてこなかった(Bavelas, 1992)。情報学が備える精緻な記述・予測を可能にする方法論の導入は、従来明らかにされてこなかった、熟練者の「対話の場」の設計に関わる対話の性質を明らかにした。具体的には、従来熟練者の技は、その経験やセンスといった資質に帰属されてきたが、「対話の場」の設計に携わる熟練者の対話を仔細に分析することによって、初心者とは区別される特有のコミュニケーション・パターンが立ち現れてくることを確認した。これにより、熟練者が実際どのように「対話の場」を設計しているのかということが可視化され、そのための方法論が体系化されることになる。このことは、熟練者の「対話の場」の設計の技を、「対話の行い方」という学習者がより習得可能なかたちで知識提供することで、学習者同士による「相互学習」の質の安定化や、学習者自身で研鑽を積める機会の増大を可能にする。また、本研究の知見は、臨床心理学領域のみならず、教育や医療等その他領域における、指導者が不在の学習者同士の勉強会や研修会という「相互学習」一般のあり方にも示唆を与え得るだろう。以上については、5. 主な発表論文等の他、テキサス大学オースチン校言語人類学講座のセミナーを通じて公開された(2008 年 11 月 17 日)。

今後の展望

本研究では、セラピストの相互学習を推進、活性化させるモデルを設計し、その効果を確認した。これは、面接という対話の実践と研究の往還の中で、学習者が実用できる知識を見出し、共有するというものであり、これまでの分析から、セラピストとクライアントのあいだに様々なレベルでの齟齬が生起することを明らかにしつつある。ここで齟齬とは、たとえば、セラピストはクライアントを勇気づけたつもりでも(介入意図)、クライアントはそう受け止めていないといった、すれ違いをさす。本研究では、この齟齬が面接のなかで解消されることと、面接が成功することが相関している可能性を、発話と身振りの量的分析と質的分析から示唆してきた。

その一方で、セラピストとクライアントのあいだの齟齬が臨床心理面接のなかでどのように生起し、解消するのかについては、未だよく分かっていない。これまで、こうしたセラピスト-クライアント間の齟齬について、

その原因を、セラピストの態度や習熟(丹治・橋本・安藤・東・小川, 2008), クライアントの能力や病態水準(Mazza, De Risio, Tozzini, Roncone, & Casacchia, 2003)などの個人的な要因に帰属する研究例は存在する。しかし、現在まで国内外を見渡しても、齟齬を個人間の現象と捉え、セラピストとクライアントの対話においてどのように生起し、解消されるのかについて、特に「お互いの発話をどのように聴き、聴かれているのか」という相互作用過程を、聴覚・音声学的な観点から、明らかにする研究は例を見ない。

以上を踏まえ、今後の展望として、臨床心理面接における対話で、セラピストやクライアントが「どのように話し(発話)、振舞って(身振り)いるのか」という本研究の着眼点に加え、「お互いの発話をどのように聴き、聴かれているのか」ということが、なぜ齟齬が生起するのかということに深く関わっているのではないかと考えている。具体的には、お互いの発話をうまく聴いたり、聴かれたりできていないことによるのではないかと、これは、発話における文字系列(言語情報)のみならず、話者の感情やかまえなどを伝達する役割を持つ音声の中のパラ言語情報(たとえば、声の高さの変化等の韻律情報)とうなずきの関連性(たとえば、タイミング)に示されるのではないかと、だとすれば、齟齬の解消のための操作可能な要件を明らかにしようと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 井上雅史・花田里欧子・古山宣洋 対話からの発話の規則性発見のための身振り情報の利用, 電子情報通信学会論文誌 Vol. J92-A, No. 11, pp. 725-733, November 2009. 査読有
- ② M. Inoue, R. Hanada, and N. Furuyama, Prediction of Misunderstanding from Gesture Patterns in Psychotherapy, NII Technical Journal, NII-2009-001E, pp. 1-19, February 2009. 査読無

[学会発表] (計14件)

- ① M. Inoue, M. Ogihara, R. Hanada, and N. Furuyama, "Utility of gestural cues in indexing semantic miscommunication", The 2010 International Workshop on Multimedia and Semantic Technologies (MUST2010), May 2010.
- ② 井上雅史・花田里欧子・古山宣洋・池田久美 カウンセリング対話における賛辞の使用と受容の不一致発見, FIT2009(第

8 回情報科学技術フォーラム), pp. 387-388, September 2009. 東北工業大学

- ③ 東山英治・伝康晴・花田里欧子・井上雅史・古山宣洋 カウンセリング場面におけるアダプタの時間的構造の分析 人工知能学会研究会資料, SIG-SLUD-A901, pp. 37-42, 北見工業大学, July 2009.
- ④ 井上雅史・花田里欧子・古山宣洋 専門志向対話のステージ分割 人工知能学会研究会資料, SIG-SLUD-A803-15, pp. 81-86, 早稲田大学 大久保キャンパス, March 2009.
- ⑤ 井上雅史・花田里欧子・古山宣洋 対面対話における発話種別の規則性と身振り, HAI シンポジウム 2008, 慶應義塾大学日吉キャンパス, December 2008.
- ⑥ R. Hanada, M. Inoue, and N. Furuyama, "Successful and unsuccessful "compliment" in Japanese: The cultural perspective of the communication in solution focused brief therapy", Conference on Solution-Focused Practice, University of Texas, Austin, November 2008.
- ⑦ M. Inoue, N. Furuyama, and R. Hanada, "Assessment of counseling stages to better understand the process toward solutions", Conference on Solution-Focused Practice, University of Texas, Austin, November 2008.
- ⑧ N. Furuyama, R. Hanada, and M. Inoue, "Conflict between what the client says and what he conveys with gesture. ---A study on the dialogue about "scaling" in intervention of solution focused brief therapy", Conference on Solution-Focused Practice, University of Texas, Austin, November 2008.
- ⑨ 井上雅史・花田里欧子・古山宣洋, 「臨床対話のマルチモーダルな理解のためのコーパス構築」 日本心理学会大会第72回大会 北海道大学, p. 939, September 2008.
- ⑩ 古山宣洋・花田里欧子・井上雅史, 「心理療法のクライアントに観られる発話と身振りの齟齬現象〜その発生と解消のプロセス」 日本心理学会第72回大会 ワークショップ「対話する身振りと身振り」 話題提供 北海道大学, p. 77, September 2008.
- ⑪ 花田里欧子・三澤文紀・矢原隆行・田代順, 日本心理学会第72回大会 (ワークショップ「ナラティブからコミュニケー

ションヘーリフレクティング・プロセス
の実践―」企画・話題提供 北海道大学,
p. 40, September 2008.

- ⑫ 岩本脩平・伊東優・荒井久美子・白石愛・
花田里欧子・古山宣洋・若島孔文, 日本
家族心理学会第 25 回大会ワークショッ
プ「心理臨床家教育を考える―上手いセ
ラピストになるためにコミュニケーション
で学ぶということ―」企画・指定
討論者 東北工業大学, pp. 118-119,
August 2008.
- ⑬ 井上雅史・古山宣洋・花田里欧子 「心
理臨床場面における会話の齟齬と身振
り」国立情報学研究所, 人工知能学会
研究会資料 SIG-SLUD-A703-13,
pp. 71-76, March 2008.
- ⑭ R. Hanada, N. Furuyama, and M. Inoue,
"Speech-gesture mismatch and how it
changes in the problem description by
a client", International Society for
Gesture Studies: Third International
Conference, Evanston, Illinois, USA,
June 18-21, 2007.

〔図書〕(計 2 件)

- ① 古山宣洋, 4.2 人々のインタラクション
『ロボット情報学 ハンドブック』(松原
仁・野田五十樹・松野文俊・稲見昌彦編),
ナノオプトニクス・エナジー ナノオブ
ト・メディア, March 2010.
- ② 花田里欧子, 第 4 章, リフレクティン
グ・プロセスを援用した心理臨床家教育
のための「相互学習モデル」―臨床実践
と臨床研究を結び合わせるパターン―
『ナラティヴからコミュニケーション
ヘーリフレクティング・プロセスの実践
―』(矢原隆行・田代順編), 弘文堂,
pp. 65-84, September 2008.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

花田 里欧子 (HANADA RYOKO)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 10418585

(2) 研究分担者

井上 雅史 (INOUE MASASHI)
山形大学・大学院理工学研究科・助教
研究者番号: 50390597
古山 宣洋 (FURUYAMA NOBUHIRO)
国立情報学研究所・准教授
研究者番号: 20333544